

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア留学で学んだ “聞くこと” “話すこと” の大切さ②

古久保 希

<「話しなさい」との助言が、その後の語学習得の糧に>

さて、イタリア滞在も最後の方になると、なんとなく耳慣れてきている自分がいました。聴くことで大事！と実感しました。

語学学校に通うのも終わり、気ままに旅行していた時、フォリーニョの街で Pietro という元医者の子ニョーレと出会いました。語学の勉強をしにイタリアに3か月間滞在している、と言うと、「1年いる方が良い」と言われました。できることなら私も1年過ごしたいよ！

フォリーニョ滞在中、モンテファルコという小さな町に行った時、カナダ人旅行者の子ニョーレ、Bill と仲良くなりました。ただし彼が話せるのは英語のみ。私は中学英語を必死に思い出すものの、イタリア語に浸かっていた私の頭は「今日・明日・昨日」の英語すら思い出せません。

イタリア語と私の数少ない語彙の英語を交ぜ、Bill に英語を教えてもらいながら、なんとか会話が成立しました。Bill は私に「君がカナダに1年いたら、英語が話せるようになるよ」と言いました。やっぱり聴くことは大事で、最低1年は必要ななあ、と思いました。

フォリーニョを去る前日、Pietro にお別れの挨拶をしたと連絡を取り、少しだけ話をしました。話をする前に Pietro は私に言いました。「私は君の言っていることが分かるから。考えずに止まら

ずに、どんどん話しなさい」。

私の話が少しでも止まると、「ほらほら、話して、話して」と急かされました。何があったか思い出そうと考えるために止まってもいけません。その後の旅行でも、極力考えずに話すことを意識して、現地の人と話をするようにしました。

言葉を話せるようになるのに「上達するには間違えてもいいから話すこと」というのはよく耳にします。そうやって話すように心掛けてきたのですが、この時の助言のおかげで、“話す”ことの大切さを本当の意味で理解できました。

トーディで勉強していた時、私は答える前に「えっと、、」と、無意識のうちによく言っていました。アメリカ人女性のクラスメートが「“えっと” って、どういう意味？」と隣の人に質問しているのを聞いて、自分がそれほどまでに頻繁に言っていることに気付きました。

なぜそこまで頻繁に言っていたのか。それは、話す内容を考えて、それから文法を頭の中で組み立てて、間違えないように話そうとしていたから。Pietro の言葉を聞いてから、とにかく、まず話出すようになりました。これは Pietro をはじめ、私の拙いイタリア語に耳を傾けてくれた人がいたからこそ実践できたことだと思います。

後日、Pietro からメッセージをもらいました。ここに残しておきたいと思います。

“Devi parlare. Senza fermarti a pensare.
Se non è giusto il tuo italiano.”

今回のイタリア滞在を通じて、私は熱烈に「イタリアに住みたい！」と思うようになりました。

イタリアは、暮らす分には日本より不便な面も多々あります。しかし、出会ったイタリア人たちの人柄がとても温かく、そんな不便さを越えるくらい、イタリアは私にとって居心地の良い場所となりました。



【Duomo di Todi】

イタリア人の温かい人柄が表れた、私の心に響いた言葉を紹介します。

ラヴェンナで出会ったモデナ在住のご夫婦からは、私の帰国を心配してくれるメールが届いて、メールの締めくくりには「あなたのおじさん・おばさんより」と書かれていました。

フォーリーニョで宿泊したB&Bの女性オーナーさ

んからは、「あなたがイタリア人と結婚したら、何かプレゼントするわ」と言われました。

ローマで泊まったゲストハウスの女性清掃員からは「イタリアに帰ってきたいなら、トレヴィの泉にコインを投げておいで。私はコインを投げて、おかげで7年ローマにいるのよ」。

ジェンツァーノのお菓子屋さんご夫婦からは、「イタリアに来たら、また寄ってね。ここであなたを待ってるわ！」

イタリアに住みたいと話すと、ほとんどの方から別れ際に「きみはいつイタリアに帰ってくるの？」と聞かれました。イタリアが私のホームであるように話してくれたことが嬉しかったです。

私の人生の中でとても大切な出会いが、3か月の間にたくさんありました。

<今回のイタリア滞在中を通して感じたこと>

まず、会話のたびに英語で話を切り出されることが多かったです。そのたびに、私はいま相手が話しているのは英語かイタリア語かを考え、英語とわかると次に「英語は分からない」と返しました（イタリア語すらおぼつかないのに）。

イタリア人の大半はイタリア語を勉強していることを喜んでくれましたが、中には「英語の方が便利なのに、どうして勉強しないんだい？」と言われることもありました（嫌味というわけではなく）。

たしかに常々便利だとは思っているのですが、どうしても興味が湧かないんですよ。…と、もし言ったら、英語圏の人や英語を勉強している人に失礼ですね。イタリア人の中には「旅行者だからといって、すぐに英語を話すのは、イタリア語を勉強している人に失礼だ」と思う人もいることがわかり、嬉しかったです。

次に、地元の人のおすすめは、旅行ガイドブック以上に参考になります。

「コルトーナの町がいいよ」と数人の地元の人から聞いて、知らなかった町に行き、陶器のお店で日本の楽焼の話をしました。

また、当初、滞在を予定していた町に行くことをステイ先の人に話すと、そこは交通量が多くてあまり美しくないよ、と言われました。なので、そこには日帰り旅行で行くだけにして、滞在するのは別の町に変更しました。結果的に「滞在しなかった」

ことで良い思い出を得られたのですが、おそらく「滞在する」を選択しても良かったのだと思います。

最後に、イタリアではなにかにつけ、よく誉められました。地域にもよりますが、基本的に何に対しても誉めてくれます。誉められ慣れてないと照れてしまいますが、誉められると、なんだか何でもできる気がしてくるから不思議です。イタリア人は、この「できる気がする」を引き出すのが上手なのだと思います。

きっと、人は誰でも「できる」を持っているんですよ。いろいろなしがらみに縛られていたり、自分で自分に「できない」という暗示をかけていたり、見えない窮屈さを感じて手足を自由に伸ばせないでいたり。日本で感じるそんな「枷」を取り払ってくれるのが、イタリア人のあたたかさなのだと思います。

(当館語学受講生)



【マルツァボットの桜】

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

来年1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催させていただきます。入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

1/8(月)11:00～12:30

1/13(土)11:00～12:30

●四条烏丸：ウイングス京都

1/11(木)19:00～20:30

●大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

1/16(火)19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験がおありの方はこちらにお申込みください。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

1/13(土)14:00～(各人30分ほど)

スペイン語 無料体験レッスン

来年1月より開講の冬期スペイン語講座に向けて、体験レッスンを開催させていただきます。入門者向け。事前予約制

●京都本校：日本イタリア会館

1/13(土)13:00～14:30

未来の女性たちへ無限大の夢を

深草 真由子

むかしむかしイタリアにリータという名の女の子がいました。大好きな家庭教師の先生がガンで亡くなったとき、リータはお医者さんになることに決めました。

リータ・レーヴィ・モンタルチーニ(1909年～2012年)。まっ白な頭髪としわしわの顔がとてもエレガントだった晩年の彼女は、最高齢の上院議員でもあった。知識階級のユダヤ人家庭に生まれ育った彼女であるが、医学部への進学は、職業をもつ女は良妻賢母にはなれないと考える父親の反対をおしきっての一大決心だったそうである。

リータは一生懸命、脳のニューロンの勉強をしました。医学部を卒業してからも大学にのこり、ジュゼッペ・レーヴィというりっぱな先生のもとで研究をつづけました。

レーヴィは高名な組織学者(作家ナタリーア・ギンツブルグの父)。科学者として人として、リータはこの人を師と仰いだ。

ところがおそろしい独裁者があらわれて、ユダヤ人を大学から追い出してしまいました。

1938年ムツソリーニが発表した、ユダヤ人を排斥する人種法のことである。これによりユダヤ人の児童は公立学校からの退学を余儀なくされ、教職にあった者は解雇された。ジャーナリスト、公証人としての活動は禁止され、弁護士や医者などの知的専門職の営みは大きく制限された。大学教授はポストを追われ、その多くはイタリアを去った。物理学者エミリオ・セグレが滞在先のカリフォ

ルニアから帰国せず、バークレー大学で職を得たのもこのためだ。その師エンリーコ・フェルミも、放射性元素を発見してその年のノーベル物理学賞を受賞しているが、ストックホルムでの式典のあとローマに戻らず、一家でアメリカへ移住した。妻がユダヤ人だったのである。両科学者はアメリカで原爆の開発にたずさわっている。二十九歳のリータもこの法律によってキャリアを突然断たれてしまった。この先、一体どうするのだろうか。



【リータ・レーヴィ・モンタルチーニ】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Rita_Levi-Montalcini

リータはレーヴィ教授といっしょにベルギーに行き、そこで研究をつづけました。しばらくしてベルギーにナチスドイツ軍が入ってくると、ベルギーにもいられなくなりました。リータはイタリアに戻り、隠れて暮らすことにしました。もう、大学の研究室に通うことはできません。それでもリータは研究をあきらめませんでした。ベッドの前に小さなテーブルを置き、縫い針でニワトリを解剖しました。戦争がひどくなって空襲がはじまると、リータはまた住む場所を変えなくてはなりません。隠れ家から隠れ家へ移りながらも、ずっと研究をつづけました。

1986年、七十七歳のとき、リータはノーベル医学賞を受賞しました。レーヴィ教授の弟子たちのあいだで、三人目の受賞者でした。

このリータ・レーヴィ・モンタルチーニの物語は子ども向けの絵本 *Storie della buonanotte per bambine ribelli. 100 vite di donne straordinarie* で読んだものだ。「ニューロン」や「独裁者」など難しい言葉がいくつかあっても、子どもたちは楽しくてどんどんページをめくっていく。



【アルテミジア・ジェンティレスキ 自画像】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Artemisia_Gentileschi

タイトルも装丁も各ページにそえられたイラストもすべてがすてきなこの本の主人公は、自分の努力と才能を信じて我が道を突きすすんだ百人の女性たち。シンデレラ？眠りの森の美女？理想の王子さまに救われて、結婚して、ハッピーエンドのお姫さまなんて、憧れの対象としてはもう古い。人生の森はさまよいながら自分の足で歩いていくもの。だからこそ、将来どこかで大きな障害にぶつかるかもしれないという厳しい現実を、まだ幼い女の子たちにも知ってもらいたい。そしてそれがどうしようもない困難にみえても、乗り越える方

法はきっと見つかるということを信じてほしい。さらに、次に生まれてくる女の子たちが同じような目にあわないで済むように、闘う勇気をもってほしい。そんなメッセージのこめられたこの絵本は、負けない、くじけない、がんばり屋の“bambine ribelli”のバイブルなのである。

著者はアメリカに留学、移住し、ジャーナリストとして働くエーレナ・ファヴィツリと、演劇を専門とするフランチェスカ・カヴァッロ。二人はカリフォルニアで起業し、幼児向けのゲームや遊び場の開発にたずさわっている(苦勞して身につけた専門知識を活かすことができる場所を求めて、外国へ行くイタリア人が今たくさんいる。この二人にもそういった事情があったのかもしれない)。彼女たちにとって夢だったというこの絵本の出版は、世界中の賛同者からクラウドファンディングで集めた資金が元になっているようだ。2017年、イタリアでもっとも売れた一冊である。

C'era una volta.....「むかしむかしあるところに、宇宙の旅を夢見る女の子がいました。また別のところには、さなぎが蝶に変身するのを根気よく観察する女の子がいました。身の危険をかえりみず、迫害される人々をかくまった女の子がいれば、体が麻痺する病気で歩くこともままならなかったのに、世界一速いアスリートになった女の子もいました」

この絵本には政治家、活動家、ジャーナリスト、小説家、学者、画家、音楽家、スポーツ選手、モデル、バレリーナ、シェフ、女王から海賊まで、さまざまな分野でそれぞれの人生を懸命に生きぬいた女性たちの物語がある。

四世紀の数学者で哲学者ヒュパティアの伝説があれば、二十一世紀からは弁護士として、ファーストレディとしてのミシェル・オバマのキャリアがある。マリ・キュリーやヘレン・ケラー、フローレンス・ナイチンゲールのように、偉人伝シリーズにならぶ顔ぶれも、女性が教育をうける権利を訴えてノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイもいる。

さらに若い世代では、花嫁として売買されるアフガニスタンの少女たちの現状をラップ音楽にのせて歌うソニータ・アリザデ、地中海の真ん中で動かなくなったゴムボートを引っ張りながら泳いで

多くの人の命を救った、シリア難民の水泳選手ユスラ・マルディニ、自認する性に応じたトイレを使う権利を求めて両親とともに裁判を闘った、トランスジェンダーの小学生コイ・マトイスがいる。

イタリアからもすばらしい女性が登場する。上で紹介したリータ・レーヴィ・モンタルチーニがまず一人。

そしてアルテミジア・ジェンティレスキ(1593年～1653年)。まだ女性が工房に出入りすることさえ許されなかった時代に芸術の世界で才能を輝かせたカラヴァッジョ派の画家である。師匠からうけた強姦の被害を司法に訴え、今で言うところのセカンドレイプにも耐えて、裁判を勝ち抜いたことでも知られている。

マリア・モンテッソーリ(1870年～1952年)。イタリア初の女性医師で、モンテッソーリ教育の考案者。子どもたちの学びと自立を助ける環境をと、「子どもの家」を設立した。

それからアルフォンシーナ・ストラダ(1891年～1959年)。自転車を猛スピードでこぐのが大好きだった彼女は、両親に理解されなかったプロへの夢に、結婚後、夫の協力を得て挑戦した。女性としてはじめてジロ・ディタリアに参戦し、男性選手さえもギブアップする過酷なコースを完走した人である。

クラウディア・ルッジェッリーニ(1922年～2016年)。第二次世界大戦中、学生からなるパルチザンのグループに加わり、アジトからアジトへ地下出版物を運搬する危険な役目になった。1945年4月25日、ミラノがナチ・ファシズムの支配から解放されたその日、日刊紙コツリエーレ・デッラ・セーラのオフィスにいち早く入り、報道の自由の回復に一役買った女性である。

レッラ・ロンバルディ(1941年～1992年)。肉やソーセージを配達する父親をよく手伝い、車の運転が楽しくてしかたがなかった少女は、F1ドライバーになった。スペイングランプリで6位につけ、女性としてはじめて入賞を果たした。

マルゲリータ・アック(1922年～2013年)。天体物理学者。イタリア人女性ではじめて天文台の長をつとめた。誕生してはやがて死にゆく星の姿に、友人に対するような親しみを覚えていたそうである。



【レッラ・ロンバルディ】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Lella_Lombardi

子ども向けの絵本に励まされ、心揺さぶられた。どんな時代、どんな境遇に生まれても、百人のヒロインたちそれぞれに内なる苦悩があり、隠れた努力があり、闘いと解放の瞬間があった。彼女らの愛、勇気、情熱は世界をよりよい方向に動かした。語り継がれることで、これからも動かしつづけるだろう、次に生まれてくる女性たちのパワーの源となって。

Evviva le donne ribelli!

Elena Favilli e Francesca Cavallo, *Storie della buonanotte per bambine ribelli. 100 vite di donne straordinarie*, traduzione di Loredana Baldinucci, Mondadori, 2017.

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>